

氏名(本籍)	さわ みや よう こ (東京都)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博乙第2364号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	楽観的帰属様式の臨床心理学的研究

主査	筑波大学教授	教育学博士	新井邦二郎
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副査	筑波大学教授	博士(心理学)	濱口佳和
副査	筑波大学講師	博士(心理学)	佐藤純
副査	筑波大学教授	教育学博士	服部環

論文の内容の要旨

(目的)

楽観的帰属様式とは、Seligman (1991) によれば、原因帰属の2つの対照的な傾向、すなわち悲観的帰属様式と対比される帰属様式であり、楽観的帰属様式(説明スタイル)をもつ人間は「楽観的」な人間であると定義される。楽観的帰属様式は、自分にとってポジティブな「正の出来事」、すなわち望ましい良い出来事が起きたとき、その出来事は内的で、永続的で、全体的な原因によるものとして説明される。反対に、ネガティブな「負の出来事」、すなわち望ましくらぬ、悪い出来事が起きたとき、その出来事は外的で、一時的で、特異的な原因によるものとして説明される。

本研究は、以下の4つの目的をもつ。第1の目的は、信頼性と妥当性を備えた「楽観的帰属様式尺度」の日本語版を作成することである。第2の目的は、楽観的帰属様式の性質を明らかにすることである。第3の目的は、楽観的帰属様式が本人ばかりでなく他者に対しても好ましい影響を与えるという側面について明らかにすることである。第4の目的は、認知行動療法のプログラムを適用して「悲観的帰属様式から楽観的帰属様式への変容」を図る事例を取り上げた上で、「楽観的帰属様式尺度」を用いたプログラムの効果を確認することである。

(対象と方法)

研究対象は、高校を卒業した大学生、短期大学生、専門学校生、社会人ならびに幼児を持つ母親である。方法は、主に質問紙法であるが、一部治療プログラムの介入法を用いた。

(結果)

①作成した楽観的帰属様式尺度が実用に耐え得る信頼性と妥当性を備えていることを明らかにした。この尺度は項目数が23と少なく、項目内容も平易で理解しやすい。また測定対象を幅広く設定することが可能となった。また実施が容易であることから対象者への負担が軽くなった。さらに正の出来事と負の出来事の両方を含む尺度であることである。これによって、正の事態に対する(永続性+全体性)の帰属様式と、負の事態に対する(永続性+全体性)の帰属様式との働きに違いがあるかどうかを確認することが可能になった。

た。

②楽観的帰属様式の性質であるが、「自己認知」との関係では楽観的帰属様式をもつ者は、自己の性格特性についてポジティブな面に偏った認知をしていること、またポジティブな面に偏った認知をしている場合、それは自己の性格特性をポジティブに評価し過ぎていることによるものであることが明らかになった。さらに「楽観的帰属様式」と「ネガティブな側面への注目」および「抑うつ傾向」との関係では、「楽観的帰属様式」が「ネガティブな側面への注目」を規定し、その「ネガティブな側面への注目」が「抑うつ傾向」を規定することが明らかになった。

③母親の楽観的帰属様式と幼児の社会性の関係について、関連母親の楽観性が高いほどその幼児の社会性は高く、逆に母親の楽観性が低いほどその幼児の社会性が低いことが示された。

④「楽観的帰属様式尺度」を用いた認知行動療法プログラムの臨床的効果は、青年を対象にして確認され、さらに悲観的帰属様式から楽観的帰属様式への変容によって「母親の育児不安」を軽減する方法についても一定の効果をあげた。

(考察)

楽観的帰属様式に関する臨床心理学的研究として、いくつかの新たな知見を示すことができたと言えよう。

審 査 の 結 果 の 要 旨

(批評)

本研究は、人の認知面のはたらきが感情面に影響することに関心をもち、認知的側面のなかでも特に楽観的帰属様式に焦点をあて、その測定方法や性質、応用的価値を明らかにしたことは高く評価できる。本研究の功績の第1は、正の出来事と負の出来事の両方を含む楽観的帰属様式尺度を開発したことである。これにより楽観的帰属様式の性質を研究するツールを提供することができた。また、悲観的帰属様式を楽観的帰属様式に変容する認知行動療法プログラムは、悲観的帰属様式で不適応状態に苦しむ人に役立つことになるだろう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。